

武蔵野日曜聖書講筵 祈祷会

信仰の凱歌（1）

――詩篇46篇――

1976年8月8日

小池辰雄

信仰の勝利の歌 避け所 いと近き助け キリストと一つになる 虚無者 一つの川 静まり
て祈れ 展開に展開 祈り

【詩篇46】

聖歌隊の指揮者によって女の声のしらべにあわせてうたわせたコラの子の歌

1 神はわれらの避け所また力である。

悩める時のいと近き助けである。

2 このゆえに、たとい地は変り、

山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。

3 たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、

そのさわぎによって山は震え動くとも、

われらは恐れない。

セラ

4 一つの川がある。

その流れは神の都を喜ばせ、

いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。

5 神がその中におられるので、都はゆるがない。

神は朝はやく、これを助けられる。

6 もろもろの民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動く、

神がその声を出されると地は溶ける。

7 万軍の主はわれらと共におられる、

ヤコブの神はわれらの避け所である。

セラ

8 来て、主のみわざを見よ、

主は驚くべきことを地に行われた。

9 主は地のはてまでも戦いをやめさせ、

弓を折り、やりを断ち、戦車を火で焼かれる。

10 「静まって、わたしこそ神であることを知れ。

わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、



全地にあがめられる」。

11万軍の主はわれらと共におられる、

ヤコブの神はわれらの避け所である。

セラ

●信仰の勝利の歌

詩篇46篇は、詩篇の中でも最も有名な詩篇の一つです。これはイザヤ書36章を見ると、アッシリヤの軍勢がエルサレムにやって来たわけです。エルサレムの方はヒゼキヤの王のときで、ラブシヤケというアッシリヤの方の使者が、こういうようにヒゼキヤ王に言ったと書いてあります。

『大王アッシリヤの王はこう仰せられる、あなたが頼みとする者は何か。口先だけの言葉が戦争をする計略と力だと考えるのか。あなたは今だれを頼んで、わたしにそむいたのか。見よ、あなたはかの折れかけている葦のつえエジプトを頼みとしているが、それは人が寄りかかるとき、その人の手を刺し通す。』（イザヤ36・4～5）

と言って、ヒゼキヤが親エジプトであつたことに対して「それはダメだ」と。アッシリヤはエルサレムの方に向かって、

「よせ。でなければ、やつつけるぞ」

というわけなんです。まあそこにずっといろいろ書いてありますが、要するに紀元前701年のことです。そういったアッシリヤの攻撃があつて、それに対して預言者イザヤが――ヒゼキヤの王が非常に恐れまたおののいて、林の如くに震えたと書いてありますが――その時にイザヤが、

「恐れることはない。神に依り頼め」

と言って、信仰を貫いた。預言者イザヤが、

「必ず神さまが護る」

と。それでアッシリヤの軍がやって来たところが、その囲んでいるところの兵士が一夜のうちに仆れてしまった。多分、疫病かなにかでしょう。これは列王紀略下18章に書いてある。そういう不思議な神さまの護りがあつた。そういうような事態の背景をもっているのではないかと一般に言われているわけです。

それでこの詩篇は、

「いかなる事に対しても神さまは護る」

という勝利の、信仰の勝利の歌です。これはマルチン・ルターが、プロテスタントの進軍ラッパとしてこの詩篇を土台にして、

「我らの神は堅き城なり」

という有名な詩を書いた。そういう謂れのあるところでは。



●避け所

「神はわれらの避け所また力である。

悩める時のいと近き助けである。

もうこの一節だけで十分であるくらいです。聖書というものは、大事な節をしつかり覚えて——「覚えて」といっても頭ではないけれども——そしてそれを身につけていることが大事です。何かいろんな事にでつくわした時に、それが本当に力にならなかったら、いくら聖書を読んだってしょうがないわけです。

私たちに言わせると、

「神はわれらの避け所」

というのは、

「キリストはわれらの避け所」

と。マルチン・ルターはそういう角度から読んでいます。彼の歌においても、

「イエス・キリストが私たちのために戦ってくださいるから、ひとつも恐いことはない」

と彼は歌っているわけですから。

キリストが今、現に生きていらつしやるですから、天界に。その中に自分を投げ入れることが、「避け所」という意味です。いついかなる時でも、道を歩いていても、どこにいても、

「主さま！ キリストさま！」

と言えば、その中に自分が入られる、投げ入れられる。自分を投げ入れる。

「ぶつ倒れてみたら、キリストの懷の中だった」

と。そういう図太い信仰にならなければダメなんです。

そうすれば、その相手がキリスト、神さまですから、それは力を持っていraftしやるから、そこからグーッと全身に力を受けとる。世に勝つ力なんですから。

力は、なにも信仰が力があるんじゃないですよ。自分を投げ出して、キリストが力を持っているので、

「投げ出す」

ことが信仰なんです。

「キリストは神さまの子である」

なんてことを信じたつてどうにもならない。そういう意味で、

「主は、キリストはわたしの逃げ所だ。逃げ込んでみたら、私はキリストの力をい

ただいて、何か知らんけれども、力が出てきました」

と。これを祈りの世界で体験し、現実になにかにぶつかって、それを体験していくこと。要するに、体験にならないことには、聖書はいくら読んでも、いくら研究しても、どうにもならない。



●いと近き助け

「悩める時のいと近き助けである」

と。我々は、人生は悩みの谷で、いろんなことが起きてきますわ。外側の幸福を望んでいたら、とうとう死に至るまでダメです。いわゆる人間の幸・不幸なんていうことを超越しなければ。そいつを乗り越えなくては。どんな時でも、悩みがあろうがなかろうが、

「いと近き助けはキリストである」

と。まあ、体力が衰えたり、いろんなことに失敗したり、いろんな事があると、つい気が弱くなるんですけども。その気が弱い時に、パウロが言っているでしょ、

「われ弱き時に強し」

と。ですから、どうぞ、どんな事があっても決してへこたれないでください。

「^せ為んかた^{のぞみ}尽くれども希望を失わず、倒さるれども亡びず」

と。そういう境地がだんだん身についてくると楽なわけです。まああんまりそれが簡単なものだから、かえってみんな体験できない。一番素晴らしいことは一番簡単なんです。それをなにか難しくしてしまっているから困る。祈り入れば、グーッと力がくる。ぜひそれを体験していただきたいですね。私なんか、まあ70歳になってやつとこそういう境地に入ったわけですけども。あなた方は若いうちに、どんどん遠慮なしにそういう境地に入っていたきたい。

●キリストと一つになる

²このゆえに、たとい地は変り、

山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。

こないだ支那^{シナ}で大地震がありました。震度6だとか7だとかいわれる。ずいぶんいろいろなことが起きているらしいけれども、あれは共産国というのはひとつも外に言わないね。それで何か援助物資をやろうというのと、

「そんなものはいらん。私たちは自力更生するんだ」

と。それは自力更生は結構なんだけれども。

とにかくいろんなことが起きている。大地震が日本にもいつどこに來るか分からない。だから、

「このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも」

なんて、こういうもの凄い言葉をいい加減な気持ちで実は読めないです。「私は本当に大丈夫か」と。

「山が海の真中に落ちるとも」

と。日本列島が陥没しても恐れないというんですから、これだけの内容を本当に身につけるには、生易しいことではないわけです。いわゆる天変地異、あるいは人災、何かあらんと。



こういうわけですから。この「何かあらん」と言うためには、絶対に

「キリストと一つになる」

ところの境地に入らなければダメです。

ところが、「キリストと一つになる」ということを言うと、

「そんなことがあるか。我々は罪びとではないか。どうして一つになれるか」

なんて、まあ無教会的な信仰はすぐそういうことを言う。では、キリストは何のために十字架にかかったんですか。我々と一つになろうと思ってキリストは十字架にかかって、

「もうお前は何も心配はいらん。それはわたしの復活の生命と一緒に生きるためだ」と。どうしてもつと皆さんが簡単になってこないかと思うですね。

「そういうもの凄い信仰はちよつと待ってくれ。まだ文学のことをやらなくていいか」

なんて(笑)、いろんなのがいるよな。それで、

「信仰と文学がとうだ」

なんて言っている。文学であろうと、哲学であろうと、経済であろうと、何であろうと、

「みんなそんなことは問題にしない」

ということですよ。人間の文化文明、そんなものはとにかく問題にしないで、捨て鉢でこのキリストの中に入ったら、問題にしないことが今度は楽に受けとれるようになるんです。そして、いかに次元がちがうか。そこから本当の創造が展開していく。それが絵であろうが、彫刻であろうが、学問であろうが、医療であろうが、何であろうがそうです。

それは、私は自分で言ってはおかしいけれども、正直、そういう質が呑み込めてきたから、私は非常に楽なんです。昔は肺病だというと、大体いつ死ぬかということがあれだったんだよな、ペニシリンの前は。だから、療養所へ行くと、なにか非常に陰惨な気持で、そして病気が移りはしないかなんてね。けれども、聖霊をいただいたら、聖霊がそちへ流れて行くからね、力が。だから、そういうことは全然心配にならない。私の話を聴いて、私の祈りを受けとつて、按手を受けとつたひとが幾人、あの清瀬(東京療養所)から立ち上がったですか。それは事実そうなんだから仕方ない。

人間小池はダメな野郎でしょう。そんなことを問題にしているやつは、私に躓いているだけの人はなしだ。

「私みたいな破れ器を神さまはお使いになる」

と、私ははつきり言っているんだ。そういうことで、私はもう平伏して感謝するだけです。それが幼児の心おさなこというんです。

●虚無者

「このゆえに、たとい地は変わり、山は海の真中に移るとも、われは恐れない。」



「汝が共にある。汝がわが内にある」

ということ。「われは恐れない」と力んだってダメですよ。

「キリストが私の中にいらつしやるから恐れません」

ということですよ。そういう言葉をその奥に読まなければダメです。

「そうか、『われは恐れない』なんて、ずいぶんこれは英雄だな」

なんて、そうじゃないですよ。英雄でも何でもありません。

³ たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、

そのさわぎによつて山は震え動くとも、

天変地異、大津波だとか、大地震だとかがやってきても、

われらは恐れない。

盛んなるかなこの信仰、というわけです。

「信仰が盛んである」

ということは、「自分の信念が強い」ということではないですよ。

「神さまはいかに素晴らしいか」

ということに驚いて、喜んでいるということが、「信仰が盛んだ」ということ。自分の側のなにもでもない。そういうことを言うのと、

「自分を何とも思わないなんて、そんな弱いことが、虚しいことがあるか」

なんておもう。「己を虚しくして」とピリピ書にも書いてあるじゃないですか。

「己を虚しくして、十字架の死に至るまで従い給えり」

と。キリストは虚無者ということだ、「虚^{むな}しい」「ケノーシス」というのは。これは本当に自分を何ものでもないという実存的な意味です。そうしたら、神さまはやっていらつしやる。キリストがやっていらつしやる。

● 一つの川

⁴ 一つの川がある。

これは天界の川、霊的な川です、天の川みたいな。黙示録22章に出ている。黙示録の言葉は旧約からきているんです、詩篇や預言書から。

その流れは神の都を喜ばせ、

いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。

天界がいかに、永遠の川が流れ、泉が流れているか。「神の都」は——アウグスチヌスが書きました——神さまが中心に住んでいらつしやるところが神の都です。いわゆる都会でも何でもない。

⁵ 神がその中におられるので、都はゆるがない。

神は朝はやく、これを助けられる。



⁶ もろもろの民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動く、

神がその声を出されると地は溶ける。

天界の姿ですが、天界はそういうように揺るがないところの不動の、神の支配し給うところ、
ところが、

「もろもろの民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動く」

と。神さまを無きものにしてゐる民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動いてゐると。神無き者は動乱になる。今、世界はもうしょつちゅう、動乱の揺れ動きの歴史を繰り返しているわけだ。20世紀はこれからどう揺れ動くか知らんです、食糧問題、公害問題、いろんなことで。国際問題、軍備は知らない間にどんどん拡張されて、ひと度誤れば世界は火の海ですね。正直、21世紀は来るか来ないかわからないですよ。

「神がその声を出されると地は溶ける」

と、おもしろいことが書いてある。

「神が声を出すと、草は枯れてしまう」

なんてイザヤ書に書いてありますが。神の怒りだね。騒ぎたつやつらに對して、神さまの聖なる怒り、憤りが出てくるわけだ。そうしたらば、もう地は溶けてしまう。もの凄い怒りの火でもって溶けてしまう。

⁷ 万軍の主はわれらと共におられる、

ヤコブの神はわれらの避け所である。

イスラエルの民ですから、ヤーヴェエを「万軍の主」としてゐます。一緒にいらつしやるから、ヤコブの神、イスラエルの神は、われらの避け所であると。その点では本当に、彼らはその民族神を世界最高の神として信じていたわけだ。我々にとつては、これはもうキリストのことです。

● 静まりて祈れ

⁸ 来て、主のみわざを見よ、

主は驚くべきことを地に行われた。

というのは、701年にあった、センナケリブのアッシリヤの軍勢が一夜にして壊滅し、囲みを解いて逃げたことを背景にしているんだらうといわれる。

⁹ 主は地のはてまでも戦いをやめさせ、

これはイザヤ書2章に似たような言葉があります。即ち、主の勢いが大きいですから、

弓を折り、やりを断ち、戦車を火で焼かれる。

こういうのは、イザヤ書2章、ミカ書4章にある。

しかし、世界の終わりに至るまで、本当の意味でこのことは全うされません。神の力が現れると、剣は剣を取る者自身で倒れていきます。ですから、決して武力が勝利をしない。



このことは、ナポレオンというような英雄が出ても、遂に彼はセントヘレナでもって福音書を繙いて、キリストの前に降参したんです。

そういうわけでありますので、戦いは本当に禍害わざわいなものです。世界は今、非常に深刻な危機に臨んでいますから。神の審判を自ら招くような事になると大変なことになる。

10 「静まつて、わたしこそ神であることを知れ。」

と。どうにもならん、人間の世界は。だから、静まつて、

「静かになつて、そうして祈れ」

ということです、「静まりて」というのは。

「静かになつて、そうして祈りの中に入れ。そうでなければ、わたしが神であることはわからんぞ」

と。まあ個人の人生でも、社会でも、国際関係でも、みな神を忘れて傍若無神になっていると、これがみんな行き詰まつてしまいます。ですから、

「静まりて、わたしこそ神であることを知れ」

という、この10節は非常に深い言葉です。ある意味においてはこの詩篇の一番大事な言葉かもしれません。詩篇の最初の言葉と、それからこの10節。これが非常に大事です。だから、「いつでも、いついかなる時にもじつと静まつて、祈りの世界に静まれ」

ということ。静かな祈りの深い世界に入る。そうしたら、

「あなたが神であることが本当にしみこんでくる」

と。そうしたら、どんな動揺も静まるし、どんな不幸も、どんなことに遭つても、必ず神の勝利をいただくことになります。

わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、

全地にあがめられる」。

11 万軍の主はわれらと共におられる、

ヤコブの神はわれらの避け所である。

「われらと共に」は、いつも申し上げているとおり、「共に」と「内に」が一つでなくてはいいかん。万軍の主、キリストは私たちの中にいらつしやる。

「われキリストのうちに、

キリストわがうちに」

という内在関係と、それから「共に」という共在関係は離すことができない。

ヤコブの神はわれらの避け所である。

砂漠のオアシスみたいだ。そこへ行くと本当に喜びと平安と力に満ちる。

そういう非常な天変地異、人災、何事が起きてても、本当の勝利はキリストを内に宿し、キリストと共にゆくところにある。その秘訣は、静まつて祈ること。そうしたら、必ず勝つ。こういうわけです。



●展開に展開

こないだPTAの夜の会で、女中さんがお給仕してくれたよな。それで、

「あんたは、私は何歳だ^{いくつ}と思う？」

と聞いたら、

「そうですね、大正十年でしょう」

なんて。

「そうかね、もう少し上だよ」

「じゃ、五年ですか」。

「そうじゃないよ、明治だよ」

と言ったら、びつくりしていた。

これはもうみんなそうなんです。このキリストの力を得ると、あなた方はもう老いることをしらなくなる。肉体は、それは多少古びるでしょうけれども、内なる霊的生命はいよいよ盛んであります。敵がいればいるほど逆に力強くなる。私なんかはたくさん敵がいるからね。だけれども、敵がいるけれども、敵を敵とも思っていないんです、正直。敵がいるといって今度は相対的な気持でもって、

「さて、この敵に勝たなければ」

なんて思ったら、負けてしまうよ。敵よりかいちまい次元が高くなる。あるいは、ひとつ自分を低く置いて、そいつを荷ない上げる力をキリストからいただく。本当にそうですよ。気の毒でしょうがないんだよ、この福音のわからない連中は。何をやっているかと。

「集会に日曜日に何年も来ているくせに、何をお前たちは聴いていたんだ」

と、正直言いたくなるよな。だから、まあそうだね、30歳前後くらいまでの信仰は当てにならないよな。いいかと思うとへんてこになったり。まあ今ここにいらつしやるのは、私は大丈夫だと信じていますけれどもね。

私はとにかく20歳から信仰に入っただけだけど。まあ私みたいな簡単なやつは疑わなかったよ、正直。ずーつときた。ただ、始めのうちは筋はよくても観念だったから、

「何か欠けているなあ」

と。先生は内村先生、藤井先生、塚本先生と一流の先生です。だから、言つてらつしやることはごもつともだし、集会に出て

「今日はつまらなかった」

と思うことは本当になかった。それだけ、ある意味において満たされていた。けれども、まだ心の世界だ。魂の本当の震撼まできていない。だから、そこが無教会の限界である。

どこに限界があるか。祈りの世界です。祈りの世界で使徒たちの次元からはどうしてもずれていた。内村先生や藤井先生は素晴らしい先生です。だから、その次元に行つてらつしやらないとは私は言いません。塚本先生でも。



先に進まなければ。展開に展開。あなた方もまた私を乗り越えて進んで行っていたきたいわけだ。そういうことで、神さまの歴史はどんどん展開していく。次から次へとキリストはあなた方の中に入って、

「汝ら是我より大いなる業^{わざ}をなす」

と、キリストは仰った。

「私はお前たちの中に入って、いよいよ大きな業をするよ」

ということです。そういうことで、どうぞ、本当のアンビション、主にあるところのアンビションを、男のかたも女のかたも、それだけのもの凄い張りをもって進んでいただきたい。今度の鹿沢の集会も爆発するような集会だから。そういうわけで行きましょう。

● 祈り

主さま、この今の世の中は本当に混沌として、日本のごときはその行く所をしりません。武藤富雄さんが遂にあなたの声を聴いて、「日本キリスト党」というのを形成せんと、立ち上がることを宣言しました。彼の政党が単なる政党ではなく、本当に国のために憂えた預言者の党として、どうぞ、武藤さんをしつかりと預言者魂また使徒的な信仰をもってお捕えくださらんことを切に願ひ奉ります。

また、きたるべき鹿沢の集会はひとつのカイロスであることを信じますが、どうぞ、主さま、これにO君の群れ、I君の群れ、また信州のK君の群れ、その他いろいろな本当にこれを喜び、これに立ち向かわんとする兄弟姉妹たちが集まります。どうぞ、あなたの天来の御言と御霊をもってこの使徒的な信仰を、みんなに一人びとりにペンテコステの如くに与えてくださらんことを切に願ひ奉ります。

私たちはまっしぐらに進みます。躓いたり、転んだりしている人たちはあなたにぶつかって、そして、彼らが本当に涙を流し立ち帰ることを祈りますが、しかし、生易しい手は伸べません。神さま、どうぞ、私たちはそのような、

「われこの地に平和を投ぜんために来たるにあらず、

火を投げ入れんとして来たり」

とキリストは仰いましたが、実に天来のこの火をもって私たちは満たされつつ行かなければ、もはやこの20世紀を乗り切ることはできません。どうぞその意味において、この兄弟姉妹たちをしつかりと…(異言)…あなたの御霊をもって満たし給わんことを切に願ひ奉る。

たくさん祈りたきことがございますが、今、兄弟姉妹たちのそれと共に、この(夏期福音特別集会の)準備の会の祈祷会を感謝し、御名により献げ奉ります。アーメン。



（参考）「キリスト教常識」第26号（1948/6/10より）

信仰の凱歌（2）

――詩篇第46篇――

（著作集第4巻『詩篇珠玉集』1980年刊に掲載）

小池辰雄

【詩篇46】

楽長に指揮をとらせコラの子らにアラモーツ（高音）調で歌わせた歌。

1 神は我らの拠所^{よりどころ} また力、

なやみの時の強き助けぞ。

2 されば我ら怖れじ、地は変り、

山々は海の最中に揺ぎ落つとも。

3 その大水轟^{とどろ}きて激らば激れ。

その漲^{みなぎ}りにより、山々は震わば震え。

4 河ありてその諸流^{ながれ}神の都を、

至高^{いとたかきもの}者の聖き住居^{すまい}を喜ばす。

5 神その中に在^{いま}し給えば。

そは小揺^{さゆら}ぎもせず。

晨^{あした}近づかば神これを助け給う。

6 民らは騒^{さわ}ぎ、国々は動きたり。

神その声を出だすや、地は崩れたり。

7 万軍の主は我らと共に。

ヤコブの神は我らの高き巖^{いわお}なり。

8 来りて見よ！ 実存^{エホバ}主の聖業^{みわざ}を。

彼は地に驚^{いくさ}きのみ業をなせり。

9 彼は戦争^{いくさ}を止どめたり、地の極^{はて}にまで。

弓をうち砕^{やぶ}き、槍^{やり}をへし折り、

車^{くるま}営^{がこい}を火にて焼き棄てぬ。

10 「汝ら鎮まれ！ 我れの神たるを知れ！

我は国々に崇^{あが}められ、全地に崇められん。」

11 万軍の主は我らと共に。

ヤコブの神は我らの高き巖^{いわお}なり。

〔註〕「アラモーツ」は「アルモーツ」（「秘かなるもの」または「少壮」）とも「オーラーモー



ツ」(「永遠なるもの」ともよめる。更に「エイラーミューツ」(「エラム」調)とも解するが、「乙女の調」「高音調」(歴代志略上15・20)と見るのが穏当であろう。これは「シエミニーツ」(第8音、低音調、詩篇6・1、12・1、歴代志略上15・21参照)に対する。

第3と第4節の間に、第7、第11両節と同じ句があるはずである。

本誌はそれ故に明かに1・3、4・6、8・10の3段の構造を有ち、各段落は「万軍の主は……」の句を以て結ばれる。

●〔詩意〕信仰の凱歌

詩篇全150篇の中から10歌を選ぶとも、5歌を択とるとも、その中にこの詩篇を数えないでは居れない。ルターが宗教改革の軍歌として、この歌に取材した自作の歌を謳うたいつつ、福音の戦を進めた心根を想う。万軍のエホバは、ルターにとっては同時にイエス・キリストであった。この雄篇から彼はいかにしばしば深い慰めと力とを与えられたことか。

「さあ、フィリップ、また詩篇第46を謳うたおうじゃないか」

と信友メランヒトンをさそって合唱すれば、うなだれた魂は奮た起たされるのであった。それが彼自身この詩篇に拠よつて作詞作曲したあの有名な、

„Ein feste Burg ist unser Gott“

「神はわが櫓やぐら」(讃美歌269)

であった。その他に我々が親しんでいる讃美歌「神はわが力、わが高き櫓やぐら」(讃美歌280)も正にこの詩篇に準じて詠われたアイザック・ワッツの歌である。

どの詩篇も決定的に年代と作者を断定することができない。しかし、どの詩篇もイスラエルという具体的民族の苦難の歴史の中から響き出でた声である。この詩が何か大きな歴史的事件の感動の中に作られたものであろうことは、全詩の現実的迫力と第1、第6、第8、第10の諸節から推測される。なお本詩の雄大な信仰内容とその雄勁ゆうけいな表現は、本詩がイザヤ的な預言者魂の作であることを推測させる。例えば第1節の、

「神は我らの避所かく所また力」

はイザヤ12・2、

「神はわが救い、われ依頼よりたのみて懼おそるるところなし、主エホバはわが力、わが歌なり」

と相応え、第2、第3節の天変地異にも動じない信仰は、イザヤ17・12、13の天地の鳴動に敵の審判を見ている信仰の勝利感と相通ずるものがあり、第4節、第5節の「神の都」の消息は、イザヤ書第60章の10節から22節の消息と相応える。第7、第11節の「インマヌエル」のおとずれは、イザヤ7・14、8・8、10の「インマヌエル」即ち「神我らと共に」を連想させる。第10節の、

「汝ら鎮しずまれ！ 我れの神たるを知れ！」



はイザヤ7・4、

「汝^{つし}謹みて静かなれ」

イザヤ30・15、

「汝ら立ち帰りて静かにせば救いを得、平穩^{おだやか}にして依頼^{よりたの}まば力を得べし」

と相照応する。

詩の形体が祭礼用にふさわしいという学者もあるが、私はこの迫力あるリズムを見ると、原作はイザヤかイザヤの弟子に相違ないと思う。然りとすれば、かの紀前701年のエルサレムの奇跡的な救いが歴史的背景となつていると見る伝統的な説がやはり最も妥当と思われる。

東方^{もうしやう}の猛鷲^{きやうく}アッシリヤが西方の巨鰐^{きやうく}エジプトと雌雄を争わんとした時、アッシリヤ王センナケリブの大軍がエルサレムを攻囲したが、預言者イザヤの神信頼とヒゼキヤ王の熱^{よみ}を嘉し給うたエホバは、アッシリヤの陣営に天軍を遣り、一夜にしてこれに殲滅^{せんめつ}的打撃を与え給うた(列王下18・19、イザヤ36・37参照)。このような史的背景はこの詩に最も相応^{ふさわ}しい。その他アレクサンダー大王の猛威を振つていた紀前第4世紀の末か、それに続く継承者等の紛争時代を想像する説もあるが採らない。

神なる実在者^{ほか}を外にして、我らが拠つて立つべきものは何か。人間的自主^{しゅ}、独立^{りつ}を主張する者をして言わしめよ。それはニーチェ的超人、ディオニソス的人間像に極まるのみ。真の自主自立は、自己を絶対他者に投じた、絶対他^た、主^{しゅ}、他^た、立^{りつ}にある。

我らは人間として「なやみ」なきを得ない。しかし、このなやみをいかに感じ、いかに受けとるかが問題である。すべてのなやみは絶対面に於て受けとられない限り、真の意味も解決への道も与えられない。絶対面においては、自己を神の前に投じて神に面接するということである。そのとき、神は神らしき力と慰めとを必ず与え給う。その「助け」は本質的に人間の想いを越えたものである。人間の想いを越えた神であるからこそ、神は唯一^{よりどころ}の拠所^{よりどころ}また力である。

火山鳴動、暴風地震の如き天変地異に、大空襲、戦車来襲の如き大動乱裏に、なお怖^{おそ}れざる信仰は、我らの魂のどん底でこの実在者に、贖罪主キリストに現実^{じつじ}は接しているものでなければならぬ。この預言者の信仰は実に此の如き突き抜けたものであった。この罪の世において、真になやむ魂は、それが極めて個人的なものであると同時に、社会のなやみをなやむことであり、同時に民族や国家や世界のなやみを何らかの意味で負うなやみである。このなやみをなやみ、これを負う立場は、実に世界内的な限界を突き破った全く終末的な信仰でなければならぬ。預言者イザヤの信仰は正に此の如きものであった。此の如く、世界苦を負い、世界苦に打ち勝つ信仰は、決定的に自己の碎かれたものであり、神に終末的に支えられている立場である。

アブラハム、モーセ、エリヤ、ホセヤ、イザヤ、エレミヤ、第二イザヤ、パウロ、ヨハネ、



ペテロ、皆然らざるなし。実に旧約新約を貫いて終末的信仰こそ、イスラエルの現実と歴史とを支えて来たものである。そして、その決定的な者は実にイエスの生と死とであった。終末はイエスにおいて極点と支点とを現に有^もっているのである。

神の都の至高者の聖所と清流の神境、エゼキエルもこのような神境を礼拝の中心とした(エゼキエル書第47章参照)。しかし、この詩においては、エゼキエルに見る如き祭司式現実性はない。ここでは世の動乱を足下に見下す神の聖都の厳かな姿が見られる。世の民はバビロンに集り、神の民はエルサレムを慕う。この作者が謳った神の都は、最も美しい終局史的終末観においてヨハネに啓示された。

詩篇第2に見るように、国々の動乱も、神の前には、おのずから崩れゆく空しき立ち騒ぎに過ぎない。人類とは何と無駄な謀略と擾乱^{じょうらん}を以て自らの墓穴を掘る者であろう。今や人類はおそろべき科学兵器の極るところを知らぬありさまである。そのみでない、大気の汚染、地中の汚染、海中の汚染、油田問題、世界的経済問題、人口問題等々、問題だらけである。ノストラダムスの預言がぶきみな顔で見ているような現実である。しかし、要するに人間社会、国家の問題中の問題は心の問題である。万人は救いを要する。たましいが神仏の問題に気がついて、神仏に立ち帰ることをしない限り、人類は亡びるであろう。

一人の神の僕イザヤが当時最強のアッシリヤの大軍を前にして神への信頼を以て立った。エホバの聖手がこの信に応えて動いた。敵は一夜のうちに壊滅した。彼は雙手^{そうしゅ}をあげて叫んだ。

「来りて見よ！ 実存主^{エホバ}の聖業^{みわざ}を」

神の決定的勝利を預言者は信じた、神は必ずや戦争を廃棄せしめ給うことを。武器もすべて碎かれることを。しかし、それはいつであろうか。

「汝ら勝手なことはやめよ。鎮まれ^{しず}！ 心碎かれよ！ 祈れ！ そして私が神

であることを知れ！」

このように呼びかけておられる神の言を、世界の人々が、特に権力者たちが、真に心のどん底で聴く期^{とき}である。肉の耳ではない。各人の心腸を以てである。心腸を以て聴くまでは、世界は火山の周辺で大爆発を待つポンペイ市と同じである。世界は本質的に失われている。ミルトンの『楽園喪失』も、ダンテの『神曲』も、ゲーテの『ファウスト』も、その詩句の奥から警告を発している。この終末的危機を自覚するならば、我々はいよいよ加減な信仰では在り得ない。キリストも使徒たちも人間の終末的現実、神の審判、神の国の到来を眼近かに意識して白熱の信に生き且つ言い且つ行じていた。それが新約聖書の現実であった。預言者たちもみな同質の現実において生き動き且つ神の言を吐いていた。20世紀の世紀末の現在はいよいよ質的に然りである。預言書や新約聖書の文字が血となり肉となるのでなければ、この危機を突破し得ない。

「汝ら鎮まれ^{しず}！ 我の神たるを知れ」

